

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**

**大学院学生研究**

**2017年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院			文学研究科	ドイツ文学専攻		
<b>研究代表者</b> (2018年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科・ドイツ文学専攻・博士課程後期課程3年		馬場 大介 印				
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名				
	文学部・教授		前田 良三 印				
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
<b>研究課題</b>	19世紀ドイツ語圏の国文学理解 －カール・フローレンツ『日本文学史』の学問史研究						
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2018年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科・ドイツ文学専攻・博士課程後期課程3年		馬場 大介 (研究代表者)				
<b>研究期間</b>	2017 年度						
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 199,424円 / (採択金額) 200,000円						

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、東京帝国大学ドイツ文学科教師カール・フローレンツが執筆した『日本文学史』の成立過程を、日本とドイツの学問史の観点から明らかにする。従来『日本文学史』は、日独学術交流の歴史の功労者フローレンツ独自の作品と見なされてきた。しかしこの通説は、彼の日本語の語学能力を鑑みれば誤りである。この点から出発して、フローレンツの研究状況と文学史本文を調査した結果、教え子のドイツ文学者に語学の面で補佐してもらいながら、日本文学の知識に関しては同時代の国文学者に、文学史の書き方に関しては19世紀のドイツ文学史記述に、作品の論じ方に関しては彼が学んだライプツィヒ大学の東洋研究の手法に倣っていることが判明した。以上から、この文学史を日独の複合的な学問文化接触の産物と規定し、今日まで通用する日本がヨーロッパの学問を一方向的に受け入れる文化接触のパラダイムを書き換えることを目指す。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[文化接触] [日独学術交流史] [日独学問史]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

①2018年1月に博士論文中間報告書を提出した。内容は、上述の「研究の概要」について詳述した序論、フローレンツの研究状況を二次資料に基づいて実証した第1章、『日本文学史』の図式的分析を通して19世紀の代表的なドイツ文学史に基づいていることを示した第2章で構成される。口頭試問の結果、中間報告書は受理された。以上を踏まえて、2018年11月末に博士學位請求論文を提出することを目指している。

②2018年3月にドイツ・テュービンゲン大学の日本学者ミヒャエル・ヴァフトゥカ教授の論文『国民の人格としての生きる過去』－昭和初期のフェルキッシュ・ナショナリズムにおける『神皇正統記』とヘルマン・ボーンネルによる『第三帝国』との比較(“Lebendige Vergangenheit als Personalität der Nation“: Das *Jinnō shōtōki* im völkischen Nationalismus der frühen Shōwa-Zeit und Hermann Bohners Vergleich mit dem Werk *Das Dritte Reich*)の日本語訳を行った。分量は、およそ30000字である。この翻訳は、指導教授である前田良三教授が編纂を担当する『文化保守主義と宗教性 ドイツと日本の近代社会における宗教的なるものの機能』(仮題, 前田良三, クラウス・アントニ, 久保田浩(編), 勉誠出版から2018年に出版予定, ページ数未定)に掲載される。この翻訳と本研究との関連は、2点挙げられる。第1に、担当した論文の冒頭で日本学のパイオニアとしてのフローレンツの見解が論じられている。第2に、ここで『神皇正統記』が、『日本文学史』とは全く異なる視点から論じられていることから、フローレンツの文学史には、神道と政治という視点に基づいた文学作品の評価が欠如しているということが明らかになった。つまり、『日本文学史』に宗教史的論述が抜けている事実に着目してみると、それはフローレンツが依拠した同時代の国文学史にも同じ現象が見て取れた。そこでさらに調べを進めたところ、幕末から明治中期にかけての代表的な国学者たちが、国学を近代化するにあたり、テキストに書かれている歴史と神道の信仰を分離させる方策を取っていたことがわかった。このように、明治国学の動向とフローレンツの文学史とを繋ぐ視点を明らかにしたことは、翻訳の仕事を通じて間接的に得られた貴重な研究成果と言える。

研究成果の概要 つづき

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

**① 誌論文：ドイツ語論文の日本語訳**

著者名：ミヒャエル・ヴァフトゥカ (馬場大介 訳)，論文表題：「国民の人格としての生きる過去－昭和初期のフェルキッシュ・ナショナリズムにおける『神皇正統記』とヘルマン・ボーネルによる『第三帝国』との比較」，雑誌名：『文化保守主義と宗教性－ドイツと日本の近代社会における宗教的なるものの機能』(仮題，前田良三，クラウス・アントニ，久保田浩 (編))，発行年：2018 年予定 (勉誠出版)，総ページ数未定。

以上に、翻訳者のひとりとして、申請者の名前が記載される。この論集は、2012 年度に立教大学で行われた国際シンポジウム「宗教的なるものと文化保守主義－日本並びにドイツの変容する社会における宗教の文化的機能」(参考：立教大学ドイツ文学論集 2012 『ASPEKT』46 号，東洋出版，2013 年，117－130 頁) がもとになっている。ヴァフトゥカ氏もこのシンポジウムで発表している。申請者が担当した論文は氏による書き下ろしで、最新の研究成果が盛り込まれており、今回初めて邦訳される。これに加えて、ドイツの日本学者の論文がこれほど早く邦訳されることは珍しい。このような貴重な論文の翻訳を完遂したことは、大学院生の功績として高く評価できる。この翻訳と本研究との関連については、「研究成果の概要②」で示した通りである。